『更級日記』の構造とその信仰遍歴
――天台本覚思想と阿弥陀浄土信仰――

飯島裕三

はじめに

『更級日記』は、古典文学の初歩的な教材として用いられることが多く、その素朴さに共感が寄せられ愛されてきた作品といえよう。しかし最近の研究の成果はそのような『更級日記』観の修正を迫っている。例えば「それを作者の実人生として読む素朴な姿勢は排さねばなるまい」[注一]というような捉え方が一般的になってきたからである。しかし考えてみればそれは当然のことでもある。『更級日記』という作品は「日記」という言葉に幻惑されて本質を見失いがちだが、その実態は作者が五十歳を過ぎた頃に四十年近くも前、物語にひたすらあこがれていた少女期の追憶から始まり、次第に物語の世界と実人生の乖離を身を以て体験した果てに書き上げた「回想記」として読むべきものなのである。しかしそこで見落としてはならないことは、彼女はその人生の過程で末法到来という時代に遭遇し、すべての宗教的な救いが否定されるという未曾有の時代を生きたことである。当初は薬師如来への現世利益的な信仰に安住していたが、その晩年にかけて、来世の救済を求めて浄土の教えにすがろうとする、真剣な宗教的回心が描かれていることに気づかなくてはならない。

ところで、もともとこの作品のベースには作者の家集がもとになっていたであろうということは現在ではほぼ定説化している。[注二]そしてその家集を背景にしながらも全体としてはその家集から脱皮し、散文として体裁を整えた作者の人生の回顧録の形をとり、自分の人生の再解釈ともいうべき作品として仕上がっている。それは日記の冒頭部を読んでみれば直ちに感得できる。

東路のみちのはてよりも、猶おくつかたにおい、でたる人、いか許かはあやしかりけむを、いかにおもひはじめける事にか、世の中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやとおもひつゝ、つれ〳〵なるひるま、宵居なとに、姉、継母なとやうの人〳〵の、その物語、かの物語、ひかる源氏のあるやうなと、ところ〳〵かたるをきくに、いとゞゆかしさまされど、わがおもふまゝに、そらにいかでかおぼえかたらむ。いみじく心もとなきまゝに、等身に薬師仏をつくりて、手あらひなどして、人まにみそかにいりつゝ、「京にとくあげ給て、物がたりの多く候なる、あるかぎり見せ給へ」と、身をすてゝ、額をつき、

いのり申すほどに、十三になるとし、のぼらむとて、九月三日門出して、いまたちといふ所にうつる。

（吉岡　曠　校注『更級日記』「新日本古典文学大系」以下『更級日記』の本文はとくに断らない限り同書による）

従来この冒頭箇所を解釈するときの前提として、日記の主を菅原孝標女であるとして読む傾向があった。それはこの日記の原本から書き写した、藤原定家直筆の写本の奥書にすでに記されていたことである。だから孝標が「上総介」であった事実に惹かれ、「あずま路の道のはて（＝常陸）」という矛盾した表現に戸惑いを覚え、それをどう解消するかで多くの議論が闘わされる結果を招いた。[注三] しかし孝標女という先入観を排除して虚心にこの箇所を読んでみたらどうなるだろうか。主人公は「東路の道のはて」である常陸よりももっと奥地で生まれ育った田舎娘である、と作者は読み手にそういう情報だけを伝えようとしていることに気付く。そしてそのことはこの日記が本質的にフィクションを内在していることを意味するのだ。しかし何故そのようなフィクションが必要とされるのか。恐らくそれは『更級日記』の書かれた十一世紀の中葉、「東路のみちのはてよりも、猶おくつかたにおいゝでたる人」という情報によって喚起される強烈なイメージが作者にはあったからである。それは『源氏物語』に登場する浮舟であった。浮舟を連想させるには「上総」という事実は都合が悪かった。作者には、あこがれの浮舟と同化したいという強い願望があったのである。浮舟は宇治八宮の三女でありながら大君や中の君とは異母妹である。常陸介の後妻となった母に従って東国で成長したヒロインであった。その浮舟をイメージさせる田舎娘が、「物語」に夢中になり、ついには「等身の薬師仏」への祈念によってついに「物語」のあふれる都への旅立ちが叶った。そういう少女の夢にあふれた時代から、人生の様々な辛酸を嘗めることで次第に人生の本質に目覚めていく。そして浮舟も理想的な男性の求愛を受けながらも決して幸せな人生を送ったわけではなかった。作者の人生には、常に浮舟の生き方が意識されていたといってもいい。つまりこの日記の作者は、これから記すことは必ずしも真実ではないと、ここで表明しているとも受けとれるのである。

それを裏づけるような虚構は、この冒頭箇所にはほかにもある。たとえば「世の中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやとおもひつゝ」という表現を考えてみよう。従来この一節についての諸家の言及はないが、孝標が道真の子孫であり、本来学問の家柄であったこと。ここに登場する継母とは「東宮大進高階成行」の娘で、後一条天皇中宮威子に仕え、後拾遺集にも一首入集するほどの教養ある人であったこと。そのような女性とともに孝標はまだ十歳ほどの作者とその姉を引き連れて上総まで下向したわけで、歌集や物語類を携行していなかったということが考えられるだろうか。都を遠くはなれた地に赴任する時、田舎暮らしをする女性の無聊を慰めるために歌集や物語類を携行して行くのは常識ではないだろうか。娘の結婚相手を田舎人に求めるのならば論外であるが、数年後に帰京した娘たちが、田舎の風に染まらず都人の感覚を失わないためにもそれは必需品であり、

親としての当然の義務であったに違いない。事実京都にたどり着いた作者が『源氏物語』五十余巻を譲り受けた相手は、「をばなる人のゐ中よりのぼりたる所」からであった。娘たちを伴って地方に下向する貴族が、教養を学ぶという側面があった物語類を携帯しないで下向するなどということはありえない。そう考えてみると『更級日記』に書かれる

世の中に物語といふ物のあんなるを、いかで見ばやとおもひつゝ、つれ〳〵なるひるま、宵居なとに、姉、継母なとやうの人〳〵の、その物語、かの物語、ひかる源氏のあるやうなと、ところ〳〵かたるをきくに、いとゞゆかしさまされど、わがおもふまゝに、そらにいかでかおぼえかたらむ。

と、まるで自分の周りには物語の草子類などはいっさい存在していなかったような書きぶりは、自分の生活環境を偽るフィクションと考えたほうがよい。つまりそこに「東路の道のはて」と同じような、自分の出自に関するフィクション・演出があり、田舎育ちをあえて強調したい理由があると思われるのである。作者の父が正五位下菅原孝標であるという事実は、作者が浮舟になりきって生きる上で不都合な情報なので、覆い隠されたと考えられるのである。

次に問題になるのが「とうしん（等身）にやくしほとけをつくりて」である。平安時代において「薬師如来」の造仏の記録を調べると、実は想像以上に「薬師如来」の作例が多いことが分かっている。[注四] その理由は本論でも言及するが、「薬師如来」は病を癒すことを主眼としてはいるが、それ以外にも実に多様な願望を受け入れてくれる現世利益を約束する代表的な仏であった。ところで、本文に「等身に薬師仏をつくりて」とあるのだが、その仏を造ったのは作者自身なのであろうか、それとも親が仏師に依頼して造らせた本格的な仏像なのであろうか。本文に素直に従えば本人の造ったものと読めるが、しかし十歳ほどの少女に等身大の仏像が造れるのかという疑問は残る。このことに関しては注釈書、研究書類でも意見が異なる。十歳足らずの作者が作ったものであるならば、稚拙な恐らくは他者が見ても薬師仏とは見えないものであったろう。後者であるならば、親が当地の仏師に頼んで作ったものであろうから、等身大のそれなりに立派な仏像であったろうと想像される。なお研究者によっては壁などに描かれた絵画ではなかったかという人もいるが、[注四] あとの記述に

人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。（三七一頁）

という一節がある以上、ここは彫像であると考えるべきであるし、仏師の造った本格的な仏像が放置されたままにされるという

のは考えにくい。また日記の他の部分に

母一尺の鏡を鋳させて、えゐてまゐらぬかはりにとて、僧をいだしたてゝ、初瀬にまうでさすめり。「三日さぶらひて、この人のあべからむさま、夢に見せ給へ」などいひて、まうでさするなめり。そのほどは、精進せさす。（四〇二～四〇三頁）

などと他者をしてその行為をさせるときには、使役の助動詞を正確に使っているところからみると、やはりここは作者の手によって造られた薬師像と考えるのがよいようである。ただしここで書かれている事が事実であったかどうかについては慎重に判断しなくてはならない。実は後に作者の夢の記事として、彼女の前世は仏師であったという夢と繋がってくるからである。また『更級日記』全体の構成を考えるとき、ここで薬師仏を見捨てて京に旅立つというのは、ある象徴的な意味が隠されているのではないかと私は考えている。この日記が作者の晩年に書かれたもので、四十年経っても彼女の記憶から消えなかった事物は、彼女のその後の人生に深く関わり、後々意味を持つエピソードだからなのである。しかもその記憶は、巧妙に意味づけされ、再構築されている可能性が高いと思われる。つまりこのように一見何気ない記述を、全体の構成に注意して読み直すと、従来気付かなかった『更級日記』のテーマが明らかになってくるのではないかと考えるのである。

一　作者の信仰形態への浮舟の影響について

「はじめに」でも述べたように、作者は日記を書くつもりなどはなく、むしろある意図によって再構成された回想記を書くつもりだったのではないか。その仮説に立つと「東路のみちのはてよりも、猶おくつかたにおいゝでたる人」という事実と相違する冒頭箇所の謎が解き明かされてくる。自己の生い立ちを浮舟に重ねることで、作中人物と一体感を持つ。それは彼女が晩年に至っても浮舟の生き方に共感を持ち続けたからではなかったか。それと同時にこの日記冒頭は作者の晩年の自己の人生を再構成しようとした意志が反映していると考えるべきである。晩年の彼女にとって、浮舟の生涯はフィクションなどではなく作者の実人生に重なるものとしての存在感を持っていたのではないか。現実と物語が交錯する中で、彼女の考える人生に不具合な出来事は、朧化されたり書き換えられたり消去されることもある。そう考えてみると、浮舟を装うのに不都合な事実は書き換えられ、「東路のみちのはてよりも、猶おくつかたにおいゝてたる人」は物語というようなものを見たこともない田舎者として表現される謎も解けることになる。

都に落ち着き物語を手に入れた彼女は、当初の目的は達成されたことになる。さてそれから大納言の娘の話、その娘が転生した猫の話。物語的要素はいくらもあるが、この作品がそのような意図で書かれたものならば、フィクションとして読まれるべきものであり、事実をありのままに書き記した日記と読むこと自体ナンセンスなことになる。それはすでに先行する「土佐日記」において実行されていたことも忘れてはならない。(注五)

ところで、この日記には浮舟について語られる箇所が全部で四か所ある。最初は待望の『源氏物語』五十四帖を「をばなる人」から譲り受けた治安元年（一〇二一）十四歳の時の回想で

（I）われはこのごろわろきぞかし、さかりにならば、容貌もかぎりなくよく、髪もいみじくながくなりなむ。光の源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟の女ぎみのやうにこそあらめと思ひける心、まづいとはかなく、あさまし。（三八六頁）

この一文の直前に彼女は

夢に、いときよげなる僧の、黄なる地の袈裟きたるが来て、「法華経五の巻を、とくならへ」といふと見れど、人にもかたらず、ならはむとも思かけず

という夢を語っている。

次に長元五年（一〇三二）作者二十五歳ころの記事に

（II）このごろの世の人は、十七八よりこそ、経よみ、行ひもすれ、さること思かけられず。からうじて思よることは、いみじくやむごとなく、かたちありさま、物語にある光源氏などやうのおはせむ人を、年にひとたびにてもかよはしたてまつりて、浮舟の女君のやうに、山里にかくしすへられて、花、紅葉、月、雪をながめて、いと心ぼそげにて、めでたからむ御文などを時〳〵まち見などこそせめ、（三九八頁）

まことに少女のロマンチックな夢とも読める記事だが、作者はすでに二十五歳であった。注意しなくてはならないのは、直後の記述に父孝標が「親からうじて、はるかに遠き東になりて」とあって、長元五年（一〇三二）父孝標は常陸介に任官している。

歳は六十歳であった。このとき作者は二十四歳。父孝標が浮舟の継父と同じ常陸介となって下向する直前に書かれていることに注意したい。そしてここでも「このごろの世の人は、十七八よりこそ、経よみ、行ひもすれ、さること思かけられず」という言葉に注意しておこう。

次は長久元年（一〇四〇）作者三十三歳と思われる結婚直後の述懐に見える。

（III）そののちは、なにとなくまぎらはしきに、物語のこともうち絶えわすられて、物まめやかなるさまに心もなりはててぞ、などて、多くの年月を、いたづらにて臥起きしに、おこなひをも物もうでをもせざりけむ、このあらましごととても、思（ひ）しことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや、光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは、薫の大将の宇治にかくしすへ給べきもなき世なり、あな物ぐるをし、いかによしなかりける心也、と思しみはてて、まめ〳〵しくすぐすとならば、さてもありはてず。

（四〇九～四一〇頁）

おそらくは夫を迎え遅い結婚生活を送ることにより、「光源氏ばかりの人」がこの世に存在しないことを痛感せざるをえなかったのだろう。（II）との間に大きな断層が生じていると見ることもできる。だが「まめ〳〵しくすぐすとならば、さてもありはてず」という言葉からは、結婚によって今までもち続けてきた物語へのあこがれが全く消え失せたわけでもないことが表明されていることに注意しなければならない。ここでも「多くの年月を、いたづらにて臥起きしに、おこなひをも物もうでをもせざりけむ、」とある述懐に注意しておく。

最後は永承元年（一〇四六）作者三十九歳の時。彼女が初瀬に参詣するときの宇治の渡しでの記事である。

（IV）つくづくと見るに、紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむ、とゆかしく思し所ぞかし。げにをかしき所かなと思つゝ、からうじて渡て、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女ぎみの、かかる所にやありけむなど、まづ思いでらる。

（四一〇頁）

この四つの記事を読むと、（I）、（II）で浮舟にあこがれ、そのような人生を送りたいと願っていた作者の夢は結婚を期に（III）でもって物語り世界に訣別したかに見える。しかし祐子内親王家に出仕する身であっては、女房として華やかな世界に身を置き高貴な方々との交際を体験し、物語世界が身近に感じられたことであろう。（IV）にいたって、作者が三十九歳を迎える頃には浮

舟の人生を娘時代と同じように肯定的に受け止めていたらしいことがわかる。それは彼女がこの日記を執筆した時点でも変らぬものであったと考えるのが自然であろうから、彼女は物語に耽溺する自分の生活を懺悔しているその一方で、浮舟の生きかたに終生あこがれていたことになる。浮舟は理想的とも思われる貴公子二人に言い寄られ、悩みながらそれらを振り切って出家の道を選択して行く。その後どのような人生を送ったかについては『源氏物語』には描かれていない。しかし浮舟は決して煩悩の多い俗世から救済されたわけでもなく、そのまま物語は途切れてしまうのであった。ここに大きな疑問が持ち上がるのだ。それはどうして晩年に至るまで菅原孝標女は、そのようなヒロインに憧れを持ち続けたのであろうかということである。ここにこそ私は『更級日記』の執筆の動機が隠されていると考えている。これについては後の章でまた論じることする。

ところで、先にも述べたように、この四つの浮舟関係の記述に共通していたことは、作者が『源氏物語』や浮舟に言及するとき、いつも心の中に宗教的な葛藤があるように書かれていることである。つまり物語りに耽溺することは罪なことであるという自責の念を抱えつつ、それにもかかわらず物語世界にのめりこむ自分を、どうにももてあまし気味に、自嘲的に語っているのである。ただしそれは五十歳を過ぎた執筆時から発せられる感想であることを忘れてはならない。ただ(Ⅳ)の記述には他と異なり、なんら宗教的な反省の辞が見出せないと考えられるが、実はここが重要なのである。「殿の御領所の宇治殿」とは藤原頼通が道長より伝領した別荘であり、永承七年に寺に改造され宇治の平等院と号したところである。この一節が書かれたのは永承元年(一〇四六)作者三十九歳の時ではあるが、『更級日記』が完成したときには既に寺院としての体裁は当然整えられていたはずである。つまり四つの記事すべてにわたって宗教的な背景が付随されていたのである。彼女は浮舟を引用するときに、常に物語にのめりこむ自分を罪深い存在と表現している。しかしそれが作者の本心から発せられたものかというと、むしろそんな自分を肯定しているかのように見えるのである。

次に引用するのは作者五十歳の時に夫俊通が信濃守に任ぜられ、その翌年夫は病を得て帰京、間もなく亡くなってしまうという悲運が記された場面であるが、彼女は自分の人生に対して次のような感慨を洩らすのであった。

昔より、よしなき物語、歌のことを心にしめで、よるひる思て、おこなひをせましかば、いとかゝる夢の世をば見ずもやあらまし。　(四三〇頁)

確かに夫を亡くしたときには自分の人生を悔い改めるような思いを持った可能性はある。しかしこの発言以降彼女が物語や歌から遠のいたかといえば、そんなことはなかったのである。もしも本心でそう思っていたのなら、この日記の書かれ方は相当現存

するものとは内容を異にしていたはずである。それは物語にのめり込んだ若き日からの自分の人生を全部否定することになるからである。彼女は物語に執着する自分の人生を全否定しているかといえば、事実は違っていたらしいことはすでに述べてきた。そうでなければ、あの冒頭箇所の生き生きとした少女期の描写は説明が出来ない。煩悩ともいうべき物語への執着を捨てずに、極楽浄土への往生という矛盾した救済を彼女はどのように解決したのか、していないのか。少なくともそれは彼女が信仰してきた薬師信仰では不可能なことであった。そのときに悩みつつ生きる浮舟の生き方こそが作者を支えることになったのではないか。

「はじめに」でも述べたように、作者はこの作品を書き出したときには、『源氏物語』の浮舟の生き方を下敷きにし、自分の実人生の再構成を企図したのではないかと述べた。そのとき彼女は常に物語よりも仏道修行を先行させるべきだという反省を口にしていた。しかしそれはいつも果たされてはいず、口先だけのことであった。私には彼女がそのような一見優柔不断な態度をとるには理由があるように思われる。それは彼女が祐子内親王家に出仕したことが原因なのではないか。内親王はこのときまだ二歳であったのだが、内親王と彼女に仕える女房のために専属の物語作家が必要とされたのではないか。定家が書いた『更級日記』の奥書に、

ひたちのかみすがはらのたかすゑむすめの日記也。（中略）よはのねざめ、みつのはままつ、みづからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ。（四三三頁）

と数々の作品群があることは、実は祐子内親王家での彼女の立場を物語っているのではないか。彼女が物語作家として出仕したのなら納得がいくことである。つまり彼女は物語作家として、物語に執着して生きるしかない立場にあったと思われるのである。そういう境遇の中での彼女の生き方については次章で述べよう。

二　『更級日記』における薬師信仰と阿弥陀信仰について

私はこの小論において、『更級日記』の構造を宗教的な面から解き明かせないかという思いで書き始めた。なぜなら作者はその冒頭部分において薬師仏を頼み、日記の最終段階では阿弥陀如来の浄土への思いが描かれているからである。それは彼女の信仰が現世利益的、招福除災的なものから、死後の安心を極楽浄土へ求める浄土教への回心を表しているように読みとれる。奇しくも薬師如来は仏教的な世界観の中で東方浄瑠璃世界の教主であり、阿弥陀如来は西方極楽浄土の教主である。「奇しくも」と

いったのは、作者が東方の地「東（あづま）」に滞在したときは東方の仏である「薬師如来」を信仰し、そこから西方に位置する「京」の地で阿弥陀如来への信仰に目覚めるという形になっているからである。とすれば『更級日記』は京の地を西方極楽浄土に見立て、そこに向かって行く菅原孝標女の信仰遍歴を述べた告白の書であるようにも読みとれる。その時に彼女を教え導いたのは『源氏物語』のなかの浮舟の生き方であった。彼女は作品の中で何度も物語りに読みふける自分を罪深い者と否定的に描いているが、その『源氏物語』によって彼女は罪深いままでも弥陀の極楽浄土へ往生できるという新たな信仰を手に入れたのではないだろうか。

そういう考えを持つきっかけになったことは従来から私は『枕草子』と『源氏物語』の宗教観の違いに違和感を感じていたことによる。例えば『枕草子』には

経は、法華経さらなり。普賢十願。千手経。随求経。金剛般若経。薬師経。仁王経の下巻。（〈一九五段〉引用文は、渡辺実校注「新日本古典文学大系」以下同じ）

仏は、如意輪。千手。すべて六観音。薬師仏。尺迦仏。弥勒。地蔵。文殊。不動尊。普賢。　〈一九六段〉

また清少納言が薬師如来を本尊としていた太秦に参詣した記事に、

八月つごもり、太秦にまうづとて見れば、穂にいでたる田を、人いとおほく見さわぐは、稲かるなりけり。……〈二一〇段〉

などがある。この前後の章段は、季節の経過に従って行なわれた物詣が集められているのだが、賀茂神社や長谷寺、清水寺など霊験あらたかな観音信仰で知られる寺院、太秦の薬師如来が挙げられているが、『枕草子』を丹念に調べると『源氏物語』と比較して阿弥陀経や阿弥陀仏など浄土教関係の記述がほとんどないことに気づく。あっても次のようなものに限られるのだ。

とほくてちかき物、極楽。舟の道。人の中。　〈一六〇段〉

これは諸注にもあるごとく「従是西方過十万億仏土有世界、名曰極楽、其土有仏、号阿弥陀」（阿弥陀経）と「阿弥陀仏、去此

不遠」（観無量寿経）などの当時世間に流布していた知識をもとにした記述であり、彼女が浄土教に帰依していたようには到底考えられない。逆に『紫式部日記』の冒頭部分は中宮彰子の皇子出産、誕生、産養の盛儀、五十日の祝宴と華やいだ記事が記され、そこに来世を祈願する浄土の教えの入る余地などあるはずもないが、日記の後半にいたると、次のような記述が見られるのである。

いかに、いまは言忌し侍らじ。人、といふともかくいふとも、ただ阿弥陀仏にたゆみなく、経をならひ侍らむ。世のいとはしきことは、すべて露ばかり心もとまらずなりにて侍れば、聖にならむに懈怠すべうも侍らず。ただひたみちにそむきても、雲に乗らぬほどのたゆたうべきやうなむ侍べかなる。それに、やすらひ侍なり。

（三一五～三一六頁）

（伊藤博校注『紫式部日記』新日本古典文学大系）

紫式部の中には明らかに清少納言とは異なる宗教観があることの証である。こういう浄土教の教えは『土佐日記』『蜻蛉日記』などにも見られない。だから『源氏物語』はそれ以前の作品と比較する時に特異な宗教観を持った作品といえる。実はこの両者の宗教観を併せ持つ中間的な作品が『更級日記』といってもよい。

ここで何故『更級日記』には浄土教信仰が描かれるのであろうか。それについては井上光貞氏の平安時代の浄土教発達に関する論考が参考になる。

まず平安前期までの貴族は律令制的身分秩序と、律令的土地制度の上に安定した生活基盤を築いていた。そのために現世の安穏を求めようとする呪術的宗教（現世利益的な観音信仰や薬師信仰）が求められた。だが延喜前後からその地盤は崩壊し始め、藤原氏の専制という政治体制が他氏の没落を招いた。そういう中で一般の貴族は生活が逼迫し、貴族社会への反省が起こり、生活の空しさを自覚し現世を穢土と観じ、その穢土を厭離しようとする浄土教発達の道が開かれた[注六]

という。そこでこの時代の矛盾を最も痛切に体験した中下層の知識人、貴族の間に浄土教の発達を見たのである。それでは藤原氏の中でも摂関を独占するような一族の間に何故浄土教が浸透したのかというと、

天皇は摂関の保護によってこそその地位を保つことができたが、摂関たる身分もまた天皇の外戚としての資格を条件として

いたから、摂関の権力は後宮に入れた子女が皇子を出生しうるか否かによって忽ちに政敵の乗ずるところとなっている。また国庫制の縮小のために律令制的俸禄に依存ができなくなった中流以下の貴族は、（中略）時の権力者に阿諛・追従し、進んでは家司・家人となることによって生活の保障を求めたが、かかる私的保護関係は、権力者自身の地位の動揺のために、たえず破綻の危機にさらされていたのである。(注七)

つまり井上氏は、平安時代に浄土教が貴族の間に広まった理由として、律令的貴族社会が摂関体制に移行していく過程で生じた藤原氏の専制化に伴う貴族の不安な隷属化にあると結論される。それは摂関を独占していたように見える藤原北家の人びとも例外ではなかった。それはよく知られているように兄弟、親族間での熾烈な権力闘争のなかで、誰が勝者となり敗者となるかは全く予想できない時代であったからなのである。こういう時代背景の中で藤原忠平は法華信仰を背景とする観音信仰を持ち、兼家は摂関として初めて出家した人ながら、阿弥陀仏への帰依はまだ見られない。そういう中で浄土教に帰依したのは、実は藤原道長が最初の人なのである。一条天皇の頃まで歴代の摂関家に拒否されていた浄土教は、最大の権力者道長によって導入されたところに平安時代の不安の構造が逆照射されるといえよう。

道長は寛仁三年病によって出家するとともに、阿弥陀堂の造立を思い立ち、これが法成寺の御堂である。（中略）出家後の道長は、ひたすら後生を祈り、念仏生活をつづけつつその生涯を終わったのである。しかも道長が念仏に帰依したこのころからは一族にも念仏に帰依するものが続出した。治安元年には道長の室倫子が法成寺のうちに西北院を、長元三年にはその女の上東門院が東北院を建てている。（中略）また同じく頼通が浄土教に帰依し、天喜元年に宇治の平等院を建てたことは周知のところであろう。(注八)

こういうことが分かってくると何故『枕草子』と『源氏物語』の間に浄土教に対する扱いの違いがあるのがよく分かってくる。つまりは清少納言が仕えた定子の後宮と、紫式部が仕えた彰子の後宮では、それぞれの後見役である道隆、道長の信仰の内容に違いがあり、その違いが反映していたのである。簡単にいえば道隆にはこの世を否定して来世を希求する欣求浄土の思いはほとんどなかった。それに比べて道長という人は、この世の栄華を一身に集めた男という印象があるにもかかわらず、心中には浄土への希求が人一倍強かったということになる。それは彼が自分の幸運というものが実は危うい関係の中にやっと成立していたものだという思いを抱いていたからであろう。権力の中枢に位置した藤原氏の一族の中で、道長は特異な存在であった。それは

『更級日記』の冒頭部分に見られた薬師信仰が、思う存分物語を読みふけりたいという現世利益的なものであり、後半になって阿弥陀仏に後生を託す浄土への信仰が現れてくるのも、実は作者自らが人生の苦悩から解き放たれようとして浄土信仰に向かったのではなくて、道長の信仰を受け継ぐ人びとに接近したことがその大きな原因であったことが分かってくるのである。それはやはり、作者三十二歳のおり、祐子内親王家に仕えたことがきっかけであった。作者が祐子内親王家に仕えることになったのは、上総から都に到着したばかりの作者が、

「物語もとめて、見せよ〳〵」と母をせむれば、三条の宮に、親族なる人の、衛門の命婦とてさぶらひける、たづねて、文やりたれば、めづらしがりよろこびて、御前のをおろしたるとて、わざとめでたき冊子ども、硯の箱にいれておこせたり。

（三百八十三頁）

と記される中の「三条の宮」とは一条天皇の第一皇女脩子内親王であり、作者が宮仕えする祐子内親王の母嫄子の父敦康親王とは同腹であった。祐子内親王の母嫄子は、頼通の養女であり、作者が宮仕えした祐子内親王の御所は頼通の邸の高倉邸であった。頼通は先述したように宇治の別荘であった建物を平等院という寺院に建て替えた本人である。そこで祐子内親王の周辺には他では見られない、浄土教信仰の雰囲気が横溢していたことは十分考えられる。『更級日記』の作者は『源氏物語』によって浄土教に対する信仰への下地は出来ていたと思われるが、そうした彼女にとって祐子内親王家への宮仕えは、彼女の信仰を実質的なものに変容させたことであろう。作者はまさに『源氏物語』の世界をそのまま経験できる理想的な宮仕えの場に迎え入れられたのであり、物語作家としての彼女には得難い経験の場であったはずである。

まづ一夜まゐる。菊の、こくうすき八ばかりに、こき掻練をうへに着たり。さこそ物語りにのみ心をいれて、それを見るよりほかに、ゆきかよふ類、親族などだにことになく、古代の親どものかげばかりにて、月をも花をも見るよりほかの事はなきならひに、たちいづるほどの心地、あれかにもあらず、うつつともおぼえで、あかつきにはまかでぬ。

（四〇六頁）

初出仕の経験は、作者に物語世界と現実のギャップを強く感じさせるものであったが、それからしばらくしてまた宮仕えに出ると、

師走になりて、又まゐる。局して、このたびは日ごろさぶらふ。上には、時〳〵、夜〳〵ものぼりて、しらぬ人の中にうちふして、つゆまどろまれず、はづかしう、もののつつましきままに、しのびてうち泣かれつつ、あかつきには、夜ふかくおりて、ひぐらし、父の老いおとろへて、我を、ことしもたのもしからむかげのやうに思たのみ、むかひゐたるに、こひしくおぼつかなくのみおぼゆ。母なくなりにし姪どもも、生まれしよりひとつにて、夜はひだりみぎにふしおきするも、あはれに思いでられなどして、心もそらにながめくらさる。

（四〇七頁）

今度の宮仕えは十日間ほどに及び、作者は強いホームシックにかかり帰宅すると父から作者を頼りきった言葉を聞かされることになったというのである。

この後の記事に唐突に作者の前世の夢の話が挿入される。その内容は作者が清水寺の僧侶であり、仏師であったという。

そこは、さきの生に、この御寺の僧にてなむありし。仏師にて、仏をいとおほくつくりたてまつりし功徳によりて、ありし素性にまさりて、人と生まれたるなり。この御堂の東におはする丈六の仏は、そこのつくりたりし也。箔をおしさして、なくなりにしぞ」

（四〇八頁）

ここで見られる夢の記述には、日記の冒頭部分に出ていた薬師如来に対する信仰が連想される。それは「御堂の東におはする丈六の仏」が何の仏かは特定できないのだが、東の御堂に安置されているからには薬師如来が想定されるからである。また清水寺は観音の霊験で有名な寺であるので、どちらにしても現世利益的な信仰心が根底にある。つまりこの時点で作者にはまだ明確な浄土への希求はは見られなかった。しかしここに続く記事では作者がだいぶ宮仕えに慣れてきた様子が窺える。

十二月二十五日、宮の御仏名に召しあれば、その夜ばかりと思てまゐりぬ。しろき衣どもに、こき掻練をみな着て、四十余人ばかりいでゐたり。しるべしいでし人のかげにかくれて、あるが中にうちほのめいて、あかつきにはまかづ。（四〇八頁）

この後の記述に注目すべきものがある。

そののちは、なにとなくまぎらはしきに、物語のこともうち絶えわすられて、ものまめやかなるさまに心もなりはててぞ、

などて、おほくの年月を、いたづらにてふしおきしに、おこなひをも物まうでをもせざりけむ、このあらましごととても、思しことどもは、この世にあんべかりけることどもなりや、光源氏ばかりの人は、この世におはしけりやは、かほる大将の宇治にかくしすゑ給べきもなき世なり、あなものぐるほし、いかによしなかりける心なり、と思しみはてて、まめ〳〵しくすぐすとならば、さてもありはてず。

（四〇九～四一〇頁）

恐らくこの反省の弁は、彼女の宮仕えが大きな影響を与えたのだと思われる。藤原頼通につながる祐子内親王家への宮仕えは刺激的な体験であったろう。彼女は物語製作者という役割を担って宮仕えをしたにもかかわらず、そこで彼女は道長以来の浄土信仰が横溢した空間で、新しい浄土信仰について開眼したはずである。引用した箇所には一見物語を否定するかのような発言も見えるが、それは彼女に物語創作上のスランプが訪れたことを言っているのではないかと考えられる。だからこそ「まめ〳〵しくすぐすとならば、さてもありはてず。」という発言が続くのである。しばらくしてそのスランプも脱しまた執筆を再開したことが「さてもありはてず」という言葉になるのであろう。

寛徳二年（一〇四五）、作者三十八歳ころの記述に、

いまはむかしのよしなし心もくやしかりけりとのみ思しりはてて、親のものへゐてまゐりなどもせでやみにしも、もどかしく思いでらるれば、いまは、ひとへにゆたかなるいきほひになりて、双葉の人をもおもふさまにかしづきおほしたて、わが身もみくらの山につみあまるばかりにて、のちの世までのことをもおもはむ、と思はげみて、霜月の二十日余日、石山にまゐる。

（四一七頁）

ここに「のちの世」という言葉が見られることが彼女の中に浄土信仰が定着した証拠になる。それこそ祐子内親王家に仕えことによる信仰心の変化に違いない。しかしながら注意を要することは秋山虔氏も指摘していることであるが、ここには「来世の安楽を願う心が、現世の名利を求める気持ちと必ずしも矛盾しない点に注意」[注九]とあることである。彼女の浄土教信仰は決して『源氏物語』に描かれるような厭離穢土の思想に裏打ちされたようなものではないというのである。しかし後に書かれる長谷寺詣での記述では、途中頼通の宇治殿に立ち寄り、

紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなる所なれば、そこにしも住ませたるならむ、とゆかしく思し所ぞか

し。げにをかしき所哉と思つつ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女ぎみの、かかる所にやありけむなど、まづ思いでらる。（四二〇頁）

という感慨を持つ。ここの記事についてはまた言及するのだが、宇治殿はやがて改築され、寺となり宇治平等院と呼ばれる。しかし彼女が立ち寄った時点ではまだ改修される前であった。それにもかかわらず彼女は極楽のイメージで宇治殿を見ている。そして日記の最終部分に至って、

さすかに、いのちはうきにもたえすなからふめれと、のちの世も、思ふにかなはすそあらむかし、とそうしろめたきに、たのむことひとつそありける。天喜三年、十月十三日の夜の夢に、ゐたる所のやのつまの庭に、阿弥陀仏たちたまへり。さたかには見えたまはす、きりひとへゝたゝれるやうに、すきて見え給を、せめてたえまに見たてまつれは、蓮華の座の、つちをあかりたるたかさ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色にひかりかゝやき給て、御手、かたつかたをはひろけたるやうに、いまかたつかたにはいんをつくり給たるを、こと人のめには見つけたてまつらす、我一人見たてまつるに、さすかに、いみしくけおそろしけれは、すたれのもとちかくよりてもえ見たてまつらねは、仏、さは、このたひはかへりて、のちにむかへにこむ、とのたまふこゑ、わかみみひとつにきこえて、人はえきゝつけすと見るに、うちおとろきたれは、十四日也。（四二〇頁）

このゆめ許そ、のちのたのみとしける。

という記述に繋がっていく。作者の浄土への信仰がどのようなものであったかは『更級日記』に描かれる記述を追えば、自ずと見えてくる。それは秋山氏の指摘するように中途半端に見えるものであり、むしろ観想念仏的な、視覚的な極楽へのあこがれが強く窺われるものである。しかし薬師仏への信仰を持っていた作者が曲がりなりにも浄土への信仰を持ちえたのは宮仕えが契機であり、愛読書であった『源氏物語』が側面からそれを誘導したのに違いない。そして私は彼女の信仰には一時代前の紫式部とは異なる救済観が芽生えていたと考える。それは末法の世に人々の救いはもはやあり得ない、という厳しい現実を突きつけられた人々が、逆に強く救済を意識し、前代とは比べものにならないほど強力な欲求となって人々の間からほとばしり出たという時代思潮が背景にある。仏教界もそれに応える救済思想を発信せざるを得なかったはずである。それがどのようなものであったかについては、次の章であらためて考えることにしよう。

三　末法思想と天台本覚思想――『更級日記』における救い――

摂関末期から院政期になると、古代国家の没落が急速に進み、社会混乱の諸相は、末法到来の災禍の現われとして貴族社会に深刻な衝撃を与えた。例えば『更級日記』作者の生きた時代を概観すると、万寿四年（一〇二七）彼女が二十歳のときに栄華の頂点を極めた道長が亡くなっている。そしてその翌年には前上総介平忠常が下総で反乱を起こし、王朝国家体制に動揺が走った。上総介といえば数年前に父菅原孝標が勤め、少女時代を過した地で起きたこの反乱に彼女は無関心ではいられなかったにちがいない。また仏教界では東大寺・興福寺・園城寺などの僧徒がしばしば乱闘を繰り返し、仏教界への不安と疑問を抱く人も多かった。そしてそのような時代の変調を末法到来という時代の危機感として受け止めていた人々も多くいたはずである。当然その中に『更級日記』の作者も含まれていた。

ここで「末法思想」について簡単に述べておこう。それは仏教における時代観といえるのだが、釈尊の亡くなられた時から後の世を、正法・像法・末法の三時に分け、正法は釈尊滅後五〇〇または一〇〇〇年の間をさし、この間では「教・行・証」、すなはち、教えと教えを実行する人と、これによって証（さとり）を開く人のまだある時期とされる。また次の像法はその後の千年とされ、仏の教えそのものと、それを学ぶ修行者は存在するが、もはや悟りを開く者はいなくなった時代だとされる。それに次ぐ末法の世は、釈尊の教えだけは残るが、人びとがいかに修行して悟りを得ようとしても到底不可能な時代なのだという。この末法にいつから入るのかについては諸説があるが、正法、像法各千年で、壬申（紀元前九四九年）入滅説によると、末法到来第一年にあたるのは永承七年（一〇五二）とされ、藤原資房の『春記』の永承七年八月条に、

長谷寺すでに焼亡し了ぬ。（中略）霊験所の第一なり。末法の最年にこの事あり。これを恐るべし。

とあり、末法の世に入った証左として恐れおののいている様子が窺える。また『扶桑略記』永承七年一月二十六日の条に、「今年始めて末法に入る」と見え、『帝王編年記』にも同じ記述が見られることなどから当時の人々、もちろん『更級日記』の作者も含めて永承七年という年が末法第一年だという認識が広まっていたことになる。

さて、そのような末法思想の理解が社会全体に認知されている背景を考えたとき『更級日記』の永承元年（一〇四六）作者三十九歳の折の次の記事は見逃すことが出来ない。

そのかへる年の十月二十五日、大嘗会の御禊とののしるに、初瀬の精進はじめて、その日、京をいづるに、さるべき人〳〵、「一代に一度の見ものにて、ゐなか世界の人だに見るものを。…」（中略）つくづくと見るに、紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを、いかなるところなれば、そこにしも住ませたるならむ、とゆかしく思ひし所ぞかし。げにをかしき所かなと思ひつつ、からうじて渡りて、殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女きみの、かかる所にやありけむなど、まづ思いでらる。

（四一八～四二〇頁）

「殿の御領所の宇治殿」は宇治の平等院のことで、もともとは河原左大臣源融の別業（別荘）を道長が入手し、長男の関白頼通が伝領したものである。この別荘は阿弥陀如来を本尊とし、浄土教系の寺院として末法第一年の永承七年に創建されたものである。ただしそれはこの記事の年から六年後にあたる。だから作者が訪れたこのときには改装工事もまだ始まっていなかったろう。しかし『更級日記』が成立した時点ではこの世の極楽浄土とも称えられた平等院鳳凰堂も完成していたことになる。作者はそのような宇治の地に、世俗の欲望の象徴として「一代に一度の見もの」である大嘗会の御禊見物を投げ捨て、極楽浄土を象徴する宇治を目指したのであった。なぜそういうことになるかというと、文中の「いかなるところなれば、そこにしも住ませたるならむ」の主語に関して、犬養廉氏が次のような指摘を行なっていることがヒントになる。[注十] 氏は通説ではここの主語を八の宮とするが、そうではなくてここは『源氏物語』の作者と考えるべきだという。その説によれば、「（作者紫式部は）どうしてこのような宇治という地に浮舟を住まわせたのだろうか」ということになろう。その思いは前文に「紫の物語に、宇治の宮のむすめどもの事あるを」とあるように『源氏物語』に拠っているのであり、それは恐らく次の一節から出てきた言葉と思われる。

さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊び給へる、河波にきほひて聞こえ侍は、いとおもしろく、極楽思ひやられ侍や」

（岩波新日本古典文学大系『源氏物語』四「橋姫」三〇六～三〇七頁）

ここでいう「姫君たち」にはまだ浮舟は含まれていないのだが、宇治は極楽を連想させる地として『更級日記』の作者には認識されており、そう考えるときに「殿の御領所の宇治殿を入りて見るにも、浮舟の女きみの、かかる所にやありけむなど、まづ思いでらる」という表現がはっきりと理解でき、作者の思いが反映していることが分かるのだ。

このように考えてみると、極楽浄土を意識する『更級日記』の作者には、末法の世を迎えたという意識によってかえって仏教的な救済に対する思いが垣間見られるのではないか。では一体作者の抱く仏教的な救済とはどのようなものなのだろうか。それ

について第一章で『更級日記』中に浮舟に関する記事が四回あることを指摘したが、そこで作者は物語りに執着する自己を一見否定的に述べながらも、実は最後まで物語に執着し続けていたことが確認された。つまりは煩悩に悩む自己を肯定しているような作者の態度が見られるといってもよいだろう。このような考え方は前世代の紫式部や清少納言の世代の人々には当然見られず、この作品の特徴的な姿勢である気がする。わたしはそれこそが当時勃興しつつあった新しい仏教的救済観の影響ではなかったかと考えるのである。その新しい救済観とは中世の浄土教思想に大きな影響を与えることになった、「天台本覚思想」と呼ばれるものである。新しいといったが、この思想自体は日本の天台宗を中心にして発展した思想であり、簡単にいうなら、衆生にはもともと仏性（＝本覚）が具有されているということである。この思想は歴史的には空海や最澄によってすでに言及されているものであり、源信の『往生要集』の中にも次のような言及がある。

まさに知るべし、生死則涅槃・煩悩則菩提・円融無碍にして無二・無別なることを。しかるに、一念の妄心によりて生死界に入りしよりこのかた、無明の病に盲られて、久しく本覚の道を忘れたり　（日本思想大系　石田瑞麿『源信』二百九頁）

ここに記される「煩悩則菩提」という言葉は本覚思想を表す言葉として特に有名であるが、末法という時代を迎え、すべての仏教的救済への道が閉ざされた現状の中で、煩悩にうち迷いながら実はそのままで救われているというのである。どうしようもない自己がそっくりそのまま阿弥陀如来によって救われるという教えは、当時の人々を惹きつける大きな力をもっていただろう。この考え方が彼女の背景になかったならば、最後まで物語という俗世の欲望に固執しつつも極楽浄土への往生をあきらめなかった理由は説明が出来ないと思うのである。ただこの教えが一般化するのは平安時代末期から鎌倉時代にかけて、法然や親鸞の登場を待たねばならないと一般的には説かれている。しかし平安時代においてこの教えは口伝や切紙相承（小さい紙切れに要点を書き記して伝授する方法）によって伝えられたらしく、[注十二] 作者も数度にわたる寺社への参詣の折や、出家した弟、あるいは祐子内親王家で催される高僧による法話などによってこの教えに触れることが出来た可能性はあると思われる。

彼女が「東路のみちのはて」において東方を照らす如来である薬師仏にすがり、上総から見れば西に位置する京都で西方極楽浄土の教主である阿弥陀如来にめぐり合う。この日記には実際の旅に、宗教的な遍歴が重なった物語としての構成が隠されているのではないかとすでに述べた。そしてそれは『更級日記』の中の次の記述によってより鮮明になってくる。

さすかに、いのちはうきにもたえすなからふめれと、のちの世も、思ふにかなはすそあらむかし、とそうしろめたきに、た

のむことひとつそありける。天喜三年、十月十三日の夜の夢に、ゐたる所のやのつまの庭に、阿弥陀仏たちたまへり。さたかには見えたまはす、きりひとへゝたゝれるやうに、すきて見え給を、せめてたえまに見たてまつれは、蓮華の座の、つちをあかりたるたかさ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色にひかりかゝやき給て、御手、かたつかたをはひろけたるやうに、いまかたつかたにはいんをつくり給たるを、こと人のめには見つけたてまつらす、我一人見たてまつるに、さすかに、いみしくけおそろしけれは、すたれのもとちかくよりてもえ見たてまつらねは、仏、さは、このたひはかへりて、のちにむかへにこむ、とのたまふこゑ、わかみみひとつにきこえて、人はえき、つけすと見るに、うちおとろきたれは、十四日也。

（四三〇頁）

このゆめ許そ、のちのたのみとしける。

『更級日記』には夢の記述が十一箇所あることが知られている。その最後の夢に当たるのが前記の記事である。これは天喜三（一〇五五）年十月十三日の暁の夢であり、『更級日記』では、ただこの一箇所だけに年号月日が明記されている。それだけ他の多くの夢と、この夢との違いを作者が感じていた証拠でもある。ところで、日記の冒頭に「人まには参りつつ額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。」とあったが、ここにきて初めて薬師仏を何故「見捨て」たのかが分かってくるのだ。彼女は薬師仏を見捨て、新たに阿弥陀仏への信仰を見い出したことをその時宣言したかったのではないか。その時というのは日記の執筆時であるが、『更級日記』の作者は薬師仏を信仰することによって人生を歩んできたが、祐子内親王家への宮仕えによって浄土信仰に触れた。しかしながら末法の世では誰にも極楽往生はかなわないといわれる。この危機を乗り切る教えが天台本覚思想なのである。当然この教えによって本当に救われるのか、作者に大きな不安もあったはずである。しかし今はその教えにすがるしかないのである。日記の最終場面に阿弥陀如来の夢の記事を置くことによって、彼女の極楽往生にいくらかの可能性が見えてきたのである。この日記はその可能性に向けて、自分の人生を改めて定義しなおそうとしたものであり、回想の過程でその人生は極楽往生をより確実にするために再構築されているのである。そう考えるとき初めて『更級日記』作者の虚構性の意味が透けて見えてくるのではないか。そして彼女が浮舟にあこがれ続けた理由もまたはっきりしてくる。彼女の出自が自分に似通っていたということもあるが、末法の世を迎えてしまった日記の作者にとって、物語の中とはいえ迷いの中で生きる浮舟という存在が身近に感じられたからである。そして自分の分身として悩み苦しみ、救いのない状況の中、それでも困難な道を歩み生き抜こうとするその姿に、フィクションを越えたリアリティがあったからであろう。それは浮舟は悩み迷う人間だからこそ、阿弥陀によって救われるという思いが彼女にあったからではないだろうか。同じように作者も終には極楽浄土へ迎えとられる、というテーマがこの日記の根底には流れているからこそ、作者は浮舟に愛着を感じ続けるのではな

いか。私はそう考えるのである。

紫式部や清少納言の時代とは異なる新たな思想を背景に持つ新しい『更級日記』観がここに誕生するのである。それは中世に各仏教宗派の思想の中核をなす「天台本覚思想」を、いち早く内包した中世への橋渡し的な作品であるということである。

四　最後に

『更級日記』の作者はその少女時代の数年間を上総で過した。その時に薬師如来に祈願したことは、『源氏物語』や多くの物語を飽きるほど読みふけることであった。彼女にとって上総より西にあたる都に向かうことは『源氏物語』を求めることであり、それは西方極楽浄土へ向かうことと結果的に同じことであると晩年になって思い至ったのではないか。そのような隠れた構造が『更級日記』にはあると考えるわけである。『更級日記』の作者は『源氏物語』に憧れ、それを読みたいがために自ら薬師如来を造り必至に祈願した。その結果上京は果たされ『源氏物語』を手に入れ、読み耽ることが可能となった。少女時代の作者は薬師仏の現世利益を十分に享受したわけである。しかし物語の中で彼女が最も気に入っていた浮舟は、薫、匂宮という二人の男性から求婚され、ついには入水自殺を企て、横川の僧都によって得度出家する。彼女にとってこの展開はどのように受けとめられたのであろうか。彼女が『源氏物語』に深く耽溺するほど、物語に執着することは背徳的な行為であり、煩悩そのものであるという矛盾した囁きかけが聞こえてきたのではないか。和歌や物語類を狂言綺語と見なし、仏道修行の妨げという考えを彼女はくり返し作品中で表明している。しかも時代はすでに宗教的救いは存在しないという末法を迎えてしまっていた。ここに一つの新しい教えが彼女の身辺から聞こえてきた。それは悩みを抱える衆生が、そのまま阿弥陀の浄土に救済されるというものであった。しかしそれはまだ芽吹いたばかりの脆弱な教えであり、不安を抱えた彼女は当時霊験あらたかといわれた石山寺、初瀬寺、鞍馬などへの物詣も繰り返していた。しかし天喜三年十月十三日の暁の夢に阿弥陀如来が現われたことによって、彼女は自分の人生を整理しなおそうと思ったのではないか。それは自分が果たして本当に極楽往生ができるのかという確認ではなかったろうか。恐らくは孤独な晩年を迎えた彼女は自分が果たして極楽往生に相応しい人間なのかの確認をすることで、いわゆる安心立命したかったのである。そう考えるときに『更級日記』がその意図に添った整理が意識的になされることで、冒頭箇所での事実と相違する記述も理解できるのである。

『更級日記』の作者は末法という時代に生きることで、天台本覚思想と呼ばれる教えをいち早く取り入れたのではないかと述べてきた。私は彼女が祐子内親王家へ宮仕えしたのは、物語作家として迎え入れられたのだと考えている。だから否応無しに物

語の世界と縁を切ることはできなかったのである。だが、人生の辛酸を少しはなめ、様々な別離の味を知るようになったとき、『源氏物語』は彼女に俗世を否定することによってでしか人は救われない、という事実を突きつけた。そのうえ末法という時代は仏教的な救済の道を閉ざしてしまった。そんな時代を彼女は新しい信仰にすがることで何とか生き抜こうとしたのではないか。

信州の更級山は姨捨山の別名である。「更級」と命名されたのはこの日記を執筆したとき作者が孤独な日々を送っていたことに由来する。物語に執着して生きてきた悔いの多い人生であるが、自分に阿弥陀如来の救いはあるのか。そんな思いを抱いて、孤独な日々に自分を見つめ直して再構成された回想記がこの『更級日記』なのである。言い換えれば、末法の世に煩悩にまみれた自分に阿弥陀如来の救いはあるのかと呻吟する一女性の手記といえよう。そのようにこの作品を読み直すとき、『更級日記』の新たな姿が我々の前に姿を現してくる。時代の思潮や暮らしに翻弄され、物語に翻弄され、だがそれこそが人間であり、それ以外に人間の存在はあり得ない。むしろそのままで我々は救われていくのだという、そういう鎌倉時代に花開く究極的な仏教思想である「天台本覚思想」。そのような仏教的救済観を内包した一女性の回想記、それが『更級日記』であったというのがこの小論の結論となる。

参考文献

注一　秋山虔「更級日記についての断章」――東海道上洛記をめぐって――論集『日記文学』笠間書院、一九九一年

注二　犬養廉　校注・訳『更級日記』日本古典文学全集　解説三七一頁

注三　犬養廉　前掲書「作者が少女期を過したのは父の任地上総である。常陸より更に奥地としたのは、自己をおぼろに登場させる一種の虚構、文飾であろう。」

注四　『浄土教の美術』日本美術全集　第7巻　巻末年表参照　学習研究社　一九八四年
『平等院と定朝』日本美術全集　第6巻　巻末年表参照　講談社　一九九四年

注五　津本信博『更級日記の研究』IV章三節「更級日記の方法」

注六　小松英雄『古典文法再入門』笠間書院

注七　井上光貞『新訂　日本浄土教成立史の研究』第二章「摂関政治の成熟と天台浄土教の興起」一〇七頁　山川出版社

注八　前掲書九六頁

注九　注2前掲書八七頁・頭注十二

注十　秋山虔　新潮日本古典集成『更級日記』三四三頁　頭注

注十一　田村芳朗「天台本覚思想概説」『天台本覚論』日本思想大系